

平安時代の文学をなぜ学ぶのか

日本の表現の歴史の始まり方は、実に面白くて奇妙でした。なぜなら原初日本語にはそれを書き記す文字が元々なかったからです。現存する奈良時代の文書（古事記・日本書紀・風土記・万葉集）を見ればすぐわかります。それらは全て漢字で書いてあるのですから。

古代日本人は中国から多くの文献を輸入し、勉強し、内容を理解することにより、自分達の世界を整え広げました。この努力をしたからこそ、日本語の意味に対応する漢字や、あるいは音に対応する漢字を「適切に選び取り」文字として借用し、書き連ねて、日本語の表現を記録することが、可能になりました。私達の前には漢字という文字しかなかったから、唯一のたどるべき道を進んだわけです。しかし漢字は難しい。「適切に選び取り」と言いましたが、そんなことを整然と最初からできるはずもなく、一字一字を書く時でさえ常にどの漢字を選ぶかという迷いがつきまといっていました。

そこでその苦労を大幅に減らすものとして、かな（片仮名・平仮名）が平安時代前期に発明されました。出来事を記録・再生する手段として、人々の記憶が唯一の頼りであったのが、テープレコーダが発明され、ビデオ録画ができるようになったようなものです。仮名が用いられるようになって初めて、今まで見えなかった繊細で奥深い人の心が捉えられるようになりました。

平安時代に、和歌が無数の人々によって爆発的に詠まれ、深い相互理解がされるようになり、また物語の散文が長い人生を様々な角度から描いて、人生全体をまるごと捉えられるようになったのも、ちゃんとした根拠があるのです。冒頭の問いに君たちは「授業科目にあるから」と答えるかも知れません。ではなぜ授業科目にあるのか。それはこの国において平安時代が、迷いを伴いつつ日本語表現の可能性をあらゆる角度から探った時代だからであり、その表現の苦闘の中に私たち現代人の表現を豊かにする鍵が、今もなおたくさん潜在しているからです。



三十六歌仙絵より小野小町

相模女子大学 学芸学部 日本語日本文学科

神奈川県相模原市南区文京2-1-1
042-742-1411（代表）
<https://sagami-nichibun.jp>



2025年度
ニチブン
学科の学びシリーズ



中古文学



（国文学研究資料館蔵「源氏物語団扇画帖 若紫巻」）

物語文学の楽しみ

竹取物語は、平安朝前期に作られた日本最初の物語です。この物語では月の都の人、かぐや姫が、五人の求婚者たちを難題で振り回し、結局誰も課題を果たせず、やがて月の世界から迎えが到着して、竹取の老夫婦や帝との別れを悲しみながら、月の世界に帰っていきます。物語の冒頭と結末はどの高校教科書にも載っていますから、読んだという人も多いでしょう。

でもそれで本当に読んだことになるかどうか。かぐや姫は二番目の求婚者が偽物を持ってきた時、それを「あはれとも見で」（何の感動もなく眺めて）います。五番目の求婚者が課題物を手に入れようとして亡くなった時には、「少しあはれと」（少し胸を打たれて）感じます。そして地上世界を去る時、帝への別れの手紙に「今はとて天の羽衣着る折ぞ君をあはれと思ひ出でける」と書きました。この三箇所を繋ぐと、別世界の非人間的存在が、うっすらとですが次第に愛情を持つようになったことが分かります。さてこれはどう捉えるべきか。

担当教員



後藤 幸良 教授



武田 早苗 教授

あまりに愛情が薄く、地上世界の記憶をすべて捨てて月の世界に帰っていくのだから、結局愛情は捨てられる悲しい運命にある〈もっと素晴らしい別の価値の世界がある〉というのが一つの解答。結局捨てざるを得ないのだけど、こんな非人情の存在ですら、次第に愛情を獲得していくのだ、それほど愛情は生きる上で重要なのだ、というのが別解。どちらが正しいと思いますか。ちなみにこれまで大多数の研究者が、第一の解を選んできました。でもこの文章を書いている〈私〉は二が正解だと思います。



ちょっと視野を変えましょう。竹取物語の百年くらい後に、源氏物語が書かれました。その冒頭（桐壺巻）に光源氏の父母の悲恋が描かれます。母は帝に愛されその結果周囲のいじめで疲れ果て病気になり亡くなっていきます。その母と帝の別れの場面に、母は最初で最後の言葉を発します。「限りとて別るる道の悲しきにか（行か／生か）まほしきは命なりけり」（あなたと別れて死んでいくのは悲しく、できたら命ある道を行きたかった）。人として生きることを断念する時、それと表裏して生きることの素晴らしさが浮き彫りになってくるという意味で、この母の歌はかぐや姫の帝への別れの歌と同じで、紫式部はかぐや姫の歌を踏まえて母の歌を作ったと思います。

さて大事なことは、これ以後父母の物語をバネとして、光る源氏の物語の本体が始まり長大に展開することです。つまり紫式部は竹取物語の中心線を第二の解で受け止め、その象徴的な証としてかぐや姫の別れの歌と同じ構造を持つ歌を、源氏物語の冒頭に埋め込んだのです。

竹取物語や源氏物語は、日本文学の重要な基盤であると言って良いでしょう。それらが含み持つ思想・文化・民俗を明かにすることは、それらの分析を通じて日本とは何かを探ることに他ならない、重要な作業（学問）なのだと思います。

ちなみに村上春樹『ノルウェイの森』の最初の辺り（第二章末）の文中に「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している。」と強調文字で記してあり、かなり以前に読んだ時、あまりに竹取物語末尾、源氏物語冒頭に似ているので驚きました。この表現はきっと小説全体を貫いているのでしょうか。作者に、「二つの物語を踏まえた表現ですか？」と聞きたいところですが、野暮なことです。作品にすべて込めていますのでそれを読んで下さい、という答えが返ってくるはず。要はいかに深く広く読むかです。

